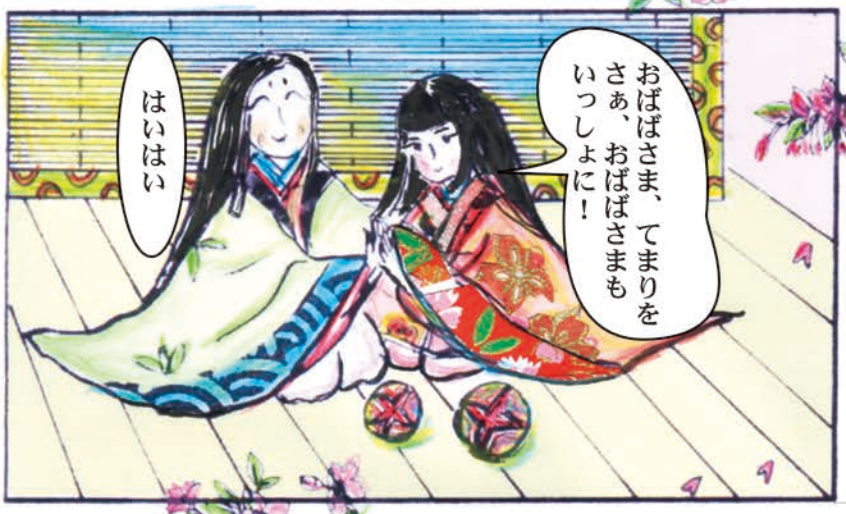
南区七大伝説
天女姫伝説

八百年以上も昔のこと
京の都に天女姫という
美しい姫君がおりました

作画：ひょうどうえいこ
制作：向洋半島ほこり隊（青崎公民館）
南区魅力発見委員会



平清盛は平安時代末期、武人として最高の位まで上りつめた人です
海に浮かぶ厳島神社を今の姿に改修しました

京で幸せに暮らす天女姫に突如・・・

ううっ

どうなさいました？

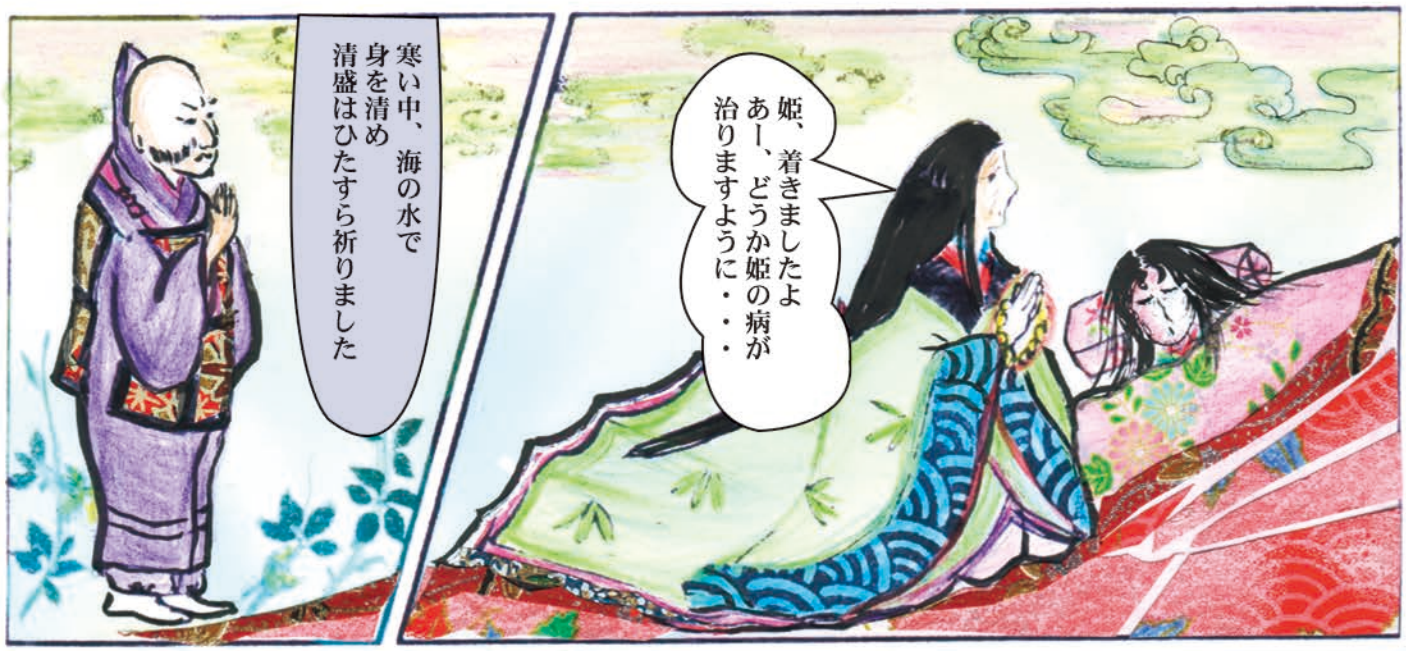
姫、お熱が。これはいけませんだれか、おらぬか！

父上さま、父上さま

天女姫さまが大変じゃすぐに清盛さまにお知らせしてくだされ！

清盛さまは姫の病を心配してかけつけていらっしゃいました
姫の病は重いのか？
疱瘡の病にございます
このおばばが代われるものでしたら・・
日本中の医者を呼べ！なんとしても姫の病を治すのじゃ
疱瘡（天然痘）は顔や体に発疹ができる死亡率の高い伝染病の一種でこの時代　不治の病として恐れられていました

姫の病は重くなるばかり
かくなるうえは厳島神社へと
清盛は二月のはじめ天女姫を
船にのせ　長い船旅に出ました

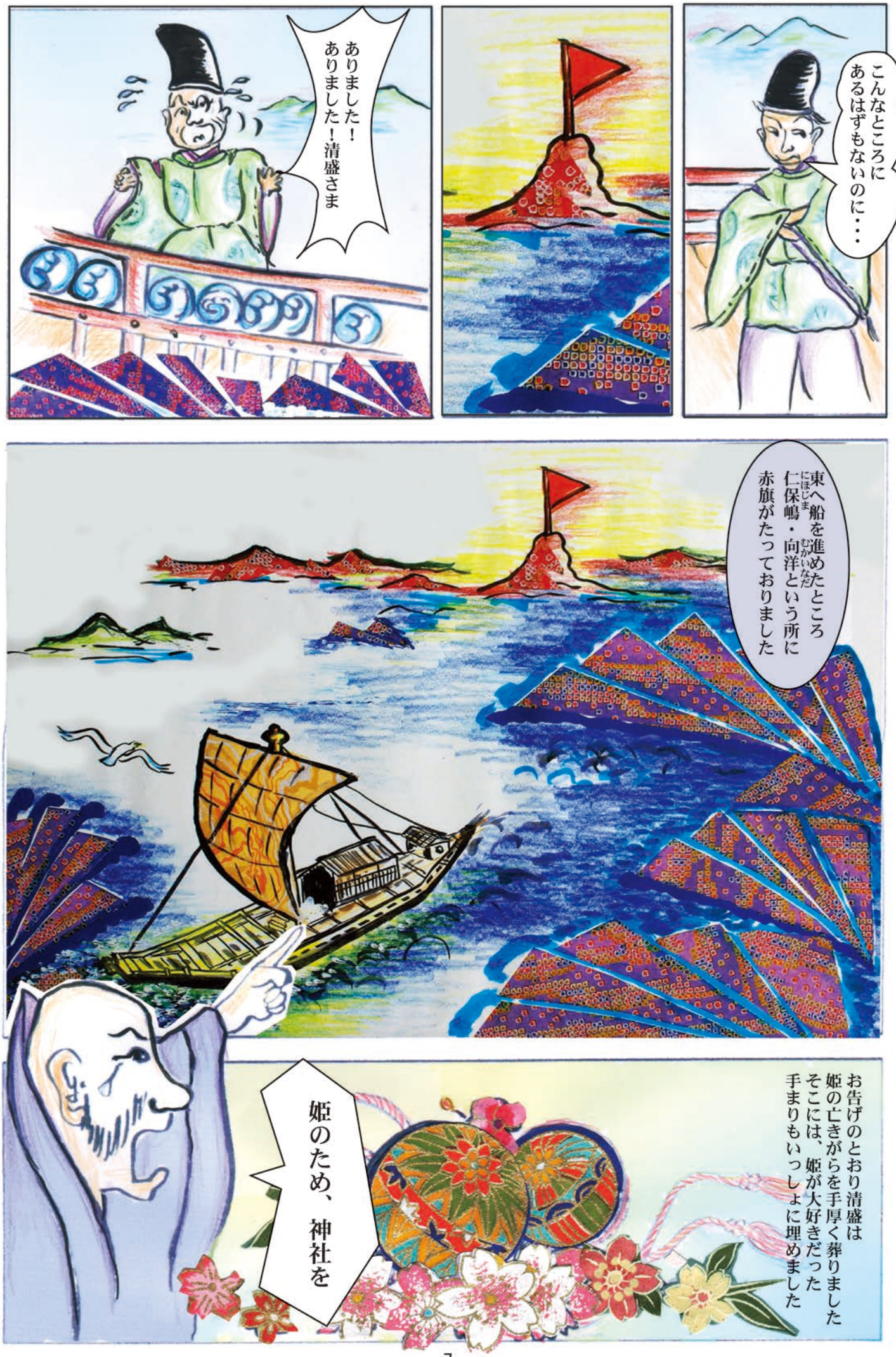


姫様はほんの一四才
これからというのに・・・

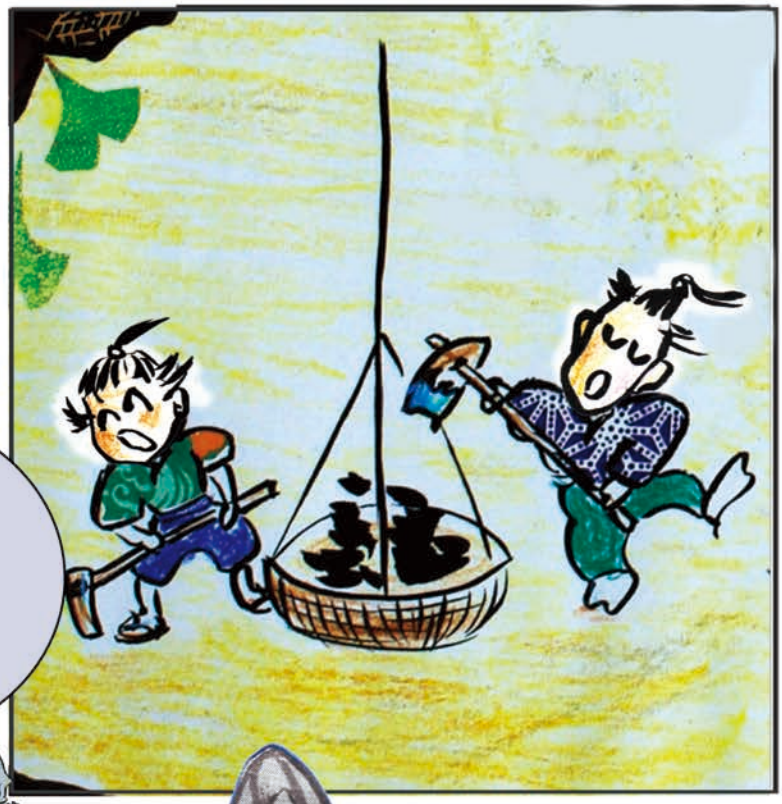
あー、京より
ここまで来ましたのに
なんてことに・・・

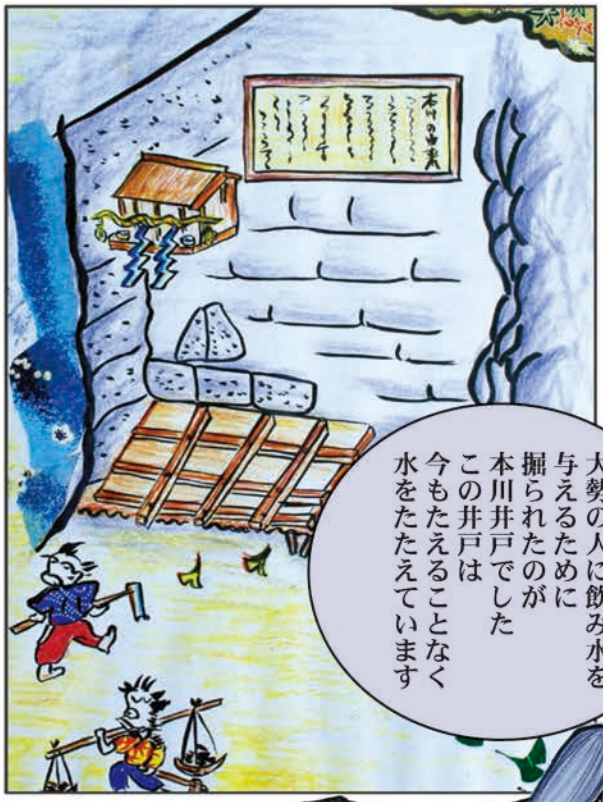
うー、お姫さまぁー

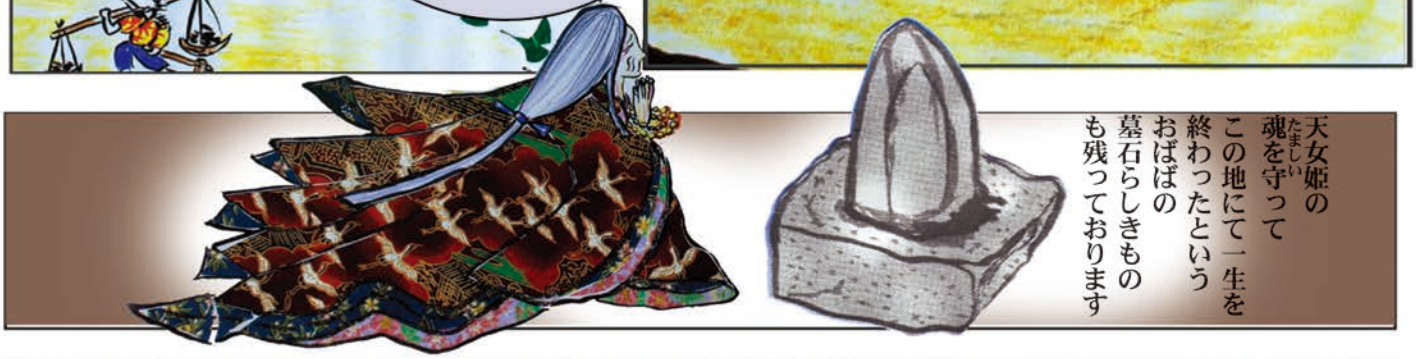
栄華を極めた平清盛でさえ
天女姫の命を救うことは
できませんでした
定められた運命に
あらがうことはできない・・・
清盛をはじめ皆の悲しみは
とても深いものでした
厳島明神さま
姫の亡きがらを
葬るところを教え給え！
これより東に赤旗があるはず
赤旗をさがせ！


こんなところにあるはずもないのに・・・
ありました！ありました！清盛さま
東へ船を進めたところ仁保嶋（にほじま）・向洋（むかいなだ）という所に赤旗がたっておりました
姫のため、神社を
お告げのとおり清盛は姫の亡きがらを手厚く葬りました そこには、姫が大好きだった手まりもいっしょに埋めました

そこから東に
神社をたてました
本尊に阿弥陀如来を祀り
その脇に十二単の天女姫の
木像を祀りました
これが疱瘡神社です
姫の亡きがらが
荒らされてはならん！
堀を造れ！
すごい話よの
向洋半島の首ねっこを
掘り切って
島にするんじゃと
姫の亡きがらを
狼や狐から守るんじゃげな
国中からえっと
人がきちょる
こんな大工事
見たこともなあで




大勢の人に飲み水を
与えるために
掘られたのが
本川井戸でした
この井戸は
今もたえることなく
水をたたえています


天女姫の
魂を守って
この地にて一生を
終わったという
おばばの
墓石らしきもの
も残っております

吾が心は
やみの夜道にあらねども
子故にまよい掘るこのほりを
清盛
堀越の丘にひっそりとたたずむ疱瘡神社は
はるか昔に生きた清盛や天女姫の思いが
今も、うずまいているようでございます

平清盛の娘、牛若丸の妹

天女姫伝説

向洋半島ほこり隊　兵藤英子

海田湾を望む堀越の丘に小さな神社があります。今は人知れずひっそりとたたずんでいますが、昔は今の何倍もの広い境内でたいそうりっぱなものだったそうです。この神社を建てたのは、平清盛です。清盛は十二単に象徴される雅やかな平安時代、京の都に暮していたたいそう位の高い人です。宮島にある厳島神社をことのほか信仰し社殿を今のような姿に造りました。

この平清盛を父とし美人で有名な常盤御前を母として生まれたのが天女姫です。天女姫は牛若丸（後の源義経）の父親の違う妹にあたります。八百年以上も昔に京の都に生まれた天女姫は天女にも似た美しい姫君でした。清盛はこのなんとも愛らしい姫をたいそう可愛がりました。ところが、天女姫は幼い頃より病気になることが多く、年頃になると疱瘡（天然痘）という、その時代にはとても怖がられていた病気にかかってしまいました。なんとしても姫の病気を治そうと清盛は一生懸命でした。日本中のお医者さんが呼ばれましたが、どのお医者さんも姫の病を治すことはできませんでした。

この上は神のお力にすがるしかないと、清盛はついに悲壮な決心をしました。寒い2月のはじめ天女姫を船にのせました。治承3年（1179年）のこと、はるばる京の都より瀬戸内海を厳島神社まで連れてきたのです。多くのお供の人を従えて都を発ち長い船旅をして、2月26日宮島に参着しました。潮で身を清め清盛はひたすら祈りました。

「南無や厳島大明神！姫の業病を癒やせ給え」と声をかぎりに叫びました。お供のものを従え宮島中のありとあらゆる神仏に泣きながらお願いしたのです。子を思う清盛は丸二日、宮島にいて祈り続けました。もうこれで姫は元気になると信じて3日目に船に乗りいよいよ帰ろうとすると、その夜どうしたものか波風が高くなりました。しかたなく有ノ浦に船をつけて泊まりました。

たちかえるなじみも有の浦なれば
神と結びをかくる白波

そのとき清盛のお供をしていた高安少将が一首の和歌を神前に奉ったところ、翌朝は不思議なことに波風が静まりました。「さあ出発だ」と船を出そうとしたところ、長い船旅の疲れが出たのか、天女姫がにわかに苦しみ始めました。姫の病気はますます重くなり、いろいろと手を尽くしましたが、みんなの願いもむなしく、2月29日ついに亡くなってしまいました。この時、姫はわずか14才でした。

父清盛をはじめお供の人たちの嘆き悲しみは、はたで見るにもお気の毒なほどでした。

「南無や厳島大明神！姫が拝所を告げ給え」清盛は姫の亡きがらを埋める所を神に伺いました。「これより七里東、赤旗のあるところへ」とお告げがありました。東へ船を進めたところ「仁保嶋・向灘」という所に赤旗がたっておりました。向洋本町赤田山あたりです。お告げのとおり清盛はこの地にたくさんの宝物とともに姫の亡きがらを埋め、手厚く葬りました。亡きがらは金銀12枚と玩具七つを中に敷き、埋めた印に梅檀(せんだん)の木を植えました。

この時、清盛はわざわざ湯灌川井戸を掘りその清水で姫の亡きがらを清めたといわれています。

姫の亡きがらを葬った場所から八間東に、四間四方のお堂を建てました。本尊に阿弥陀如来を祀り、脇立てに十二単で身を飾った14歳の美しい立姿の天女姫の木像を祀りました。これが疱瘡神社のいわれです。

更に、清盛は姫の亡きがらを狼や狐などから守るために、半島であった向洋の山を切り開いて堀を作りました。海の潮を入れ疱瘡神社いったいを島にしてしまったのです。それは国中の人を集めての大工事でした。堀越という地名などが今も残っています。その時、大勢の人たちに飲み水を与えるために掘ったのが本川井戸でした。

吾が心はやみの夜道にあらねども
　　子故にまよい掘るこのほりを

その時、清盛が詠んだ歌です。この井戸は、その昔清盛が我が子可愛さゆえに掘り割った大工事の跡を物語るかのように今も絶えることなく豊かに水をたたえています。

清盛はこの地に五十日くらいとどまり、その後、京の都へ帰って行きました。京へ帰る前夜、清盛は掘り割った山の先端に立ち、はるか西にそびえる極楽寺山の観音様を伏し拝み一心不乱に祈願しました。「願わくば冥土(めいど)にある姫に力を合わせ給え」すると不思議にも観世音菩薩が現れ「汝(なんじ)は厳島を崇(あが)めまつる故、天女姫を疱瘡神として祀り広く世のため民衆のために尽くすならば、我ともに力を合わせ命あるものすべてを護らん」と告げ去っていかれました。清盛は夢うつつでしたが、ふと見れば近くの大きな石に観音様のお姿がありありと映(うつ)っていました。

清盛が都へ帰った後も、天女姫の侍女であった人がこの堀越の地にとどまり、亡くなるまで天女姫の魂を守ったそうです。疱瘡神社の東南にわずか数坪の畑地と墓石が残っていたと伝えられております。

広島市南区堀越三丁目二十二番七号。大きな桜の木があるこの丘に、今もひっそりたたずむ疱瘡神社。八百余年にもなる、はるか昔に思いをめぐらせ、みなさまも一度訪ねてみられてはいかがでしょうか。

向洋半島

疱瘡神社

切り開かれた半島跡

本川井戸

赤田井戸

月見山

天女姫伝説の時代背景

（解説）　平清盛（１１１８～１１８１）は平安時代末期の武士ですが、父・平忠盛の後ろ盾と白河法皇のご落胤説もあり太政大臣にまで上りつめた破格の出世を遂げた人です。

常盤御前は名もない町娘でしたが九条院呈子の雑仕女として千人の美女の中からただ一人選ばれるほどの美貌の持ち主で宮廷に仕え、その後源義朝の側室となり乙若、今若、牛若（後の源義経）の三人の子を設けました。１１５９年に平治の乱が起こり、反平家の一人であった源義朝は追討され殺されます。義朝を失った常盤御前は、三人の幼い子を助けたいと敵将である清盛の所に助命嘆願にいきます。そして清盛のもとに身をおき清盛との間に天女姫が生まれるのです。

天女姫が亡くなった次の年安徳天皇が即位し、清盛の発言力は増していきますが、反平家の圧力も徐々に高まり、熱病で清盛が没してのち僅か４年で「源平の戦い」により、平家一門は壇ノ浦に海の藻屑として消え去り滅亡してしまうのです。１１４６年「安藝の守」に任ぜられた清盛は、平氏一門の将として度々この辺りを訪れたことでしょう。天女姫が眠る向洋半島を歩きますと、清盛が月見の宴を催したという「月見山」や、平家の陣地を示す赤旗から転訛して「赤田」という地名になった場所や、更に清盛が厳島神社造営の折その木材を集積したという「延命湊」などをたどることができます。

古い時代不治の病であった疱瘡を鎮めるため創建された疱瘡神社は全国各地に数多く存在しますが、清盛の娘が祀られているという点で、この堀越にある疱瘡神社は、一段といわれの高い興味深い神社であるといえましょう。

このお話の出典は主に「仁保村志」「灘の歴史」ですが、この伝説は平家物語第四巻「厳島御幸」及び「還御」と似通える節もあると断ってあります。時空を超えてはるか昔の平安時代を偲びながら平家ゆかりの事物を訪ねつつ向洋半島を歩いてみられるのも面白いのではないでしょうか。

向洋半島ほこり隊　児玉　晃

向洋半島ほこり隊おススメまち歩き

歴史と文化がしっとりとなじんだ町へようこそ！

落ち着いた家並み。ゆっくりと時間が流れていく。ふと気づくと小道があり、僅かな好奇心といたずら心が足を向けさせる。毛細血管のように路地が伸びている。一体何処に出るのだろう。漁業で栄えたこの町。歩きあるいて海の近くまでやってきた。磯のにおいが心地よく鼻をくすぐる。そうしてその向こうには、瀬戸の島に来たかと錯覚しそうな自然の砂浜にアッと驚き、新たな興味がわいて来る。

①三階建ての珍しい土蔵／向洋地区に土蔵は多いが、三階建てのものは珍しい。持ち主の豊かさの現れかもしれない。

②伝統建築の澤田家／明治11年に建築された伝統ある日本家屋。先祖の七右衛門は仁保嶋村の村長。明治の元勲、伊藤博文公も訪れた。

③舟板壁のある民家／廃船になった舟の側板が家壁を守っている。防水の役目として立派に再生利用されている。

④昔懐かしい木製電柱／この地域にもまだ数本の木製電柱が残っている。昭和15年製のこの電柱には当時の看板がある。

⑤軒下に防火バケツが並ぶ／昔は自衛のために各家で水を溜めていた。今でも防火意識の高揚に役立っている。

⑥向洋牡蛎供養碑／隣の「魚貝藻碑」とあわせ、漁業の繁栄を偲び、多くの生物の霊を慰める。昔、ここは港の船溜りで、漁業の盛んな頃は町の中心地。交番や火の見櫓、長い雁木もあった。今は大原ポンプ場と広島バスの車庫になっている。

赤色の道が回遊散策ルートです。

●まち歩きのお問い合わせやご相談は
・・・・・・・広島市青崎公民館へ(TEL082-281-3802)

⑦地域の氏神・大原神社／永禄年間（1560年代）に疫病や災害を鎮めようと創建された。自然の残る森、桜の名所としても楽しまれている。

⑧海道と呼ばれた古い道／大昔の海岸沿いの道。下の渡し場を降りた通勤者や、港に入った行商の旅人もこれを通って、堀越から海田方面へ向かって行った。

⑨下の渡しの石段／海街道での玄関口。昔は舟での往来が便利だった。戦後しばらくまでは渡し舟もよく利用されていた。対岸には舟が立ち寄っていた雁木も残っている。

⑩今も残るカキの作業場／今ではカキの漁場は沖合いに移ってしまった。冬になるとここでカキ打ちの作業が行われている。

⑪自然が残る貴重な砂浜／市街地の中で唯一の護岸のない貴重な砂浜。干潮の時に砂浜に下りると、どこかの島の浜辺に遊ぶ気分になる。

井戸端はご近所の情報交換・憩いの場としてもなじまれた。その後水道が普及して徐々に使われなくなってきたが、今でも井戸は静かに水をたたえて、人々の生活を見守っている

Aかんじん川井戸
B大森井戸
C赤田井戸
D梨の木川井戸
E大林井戸
F養命水井戸
G妙見井戸
H奥の谷井戸
I長命水井戸
J澤井井戸

●広島市中心部よりのアクセスは・・・・・

広島バス21号線　広島港(プリンスホテル)――紙屋町――広島駅――向洋本町または向洋大原下車

広島バス21号線　県庁前――広島駅――向洋本町または向洋大原下車

その他の交通機関の場合(JR・郊外線のバスなど)―青崎公民館で現地への行き方をお聞きください

発行　初版：南区魅力発見委員会（南区役所地域起こし推進課内）　重版：南区役所地域起こし推進課（令和7年1月）
〒734-8522 広島市南区皆実町一丁目5番44号　TEL 082-250-8935　FAX 082-252-7179